

培養温度の違いによる冷水病菌の生存性

菅原 和宏

◆背景・目的

アユ冷水病に対する加温処置は23℃3日間、28℃3日間の2回加温で効果があることが知られているが、この付近の温度帯における冷水病菌の生存性を調べるために、培養菌を用いた *in vitro* 試験を行った。

◆成果の内容・特徴

- 冷水病菌を改変サイトファーガ液体培地で培養し、菌数を 10^6 CFU/mLに調整して、22.1、23.2、24.3、25.0、26.5、27.1および28.2℃で振とう培養し、経時的にサンプリングして生菌数をミスラ法で計数した。
- 28.2および27.1℃ではそれぞれ1日および3日後に検出限界（4.0CFU/mL）以下となった。22.1および23.2℃では増殖し、24.3、25.0および26.5℃では一旦は減少するが、その後菌数の増加が見られた（図）。

◆成果の活用・留意点

- 27.1℃で菌を死滅できることから、除菌を目的とした加温処置を27℃で可能かどうか調べる必要がある。

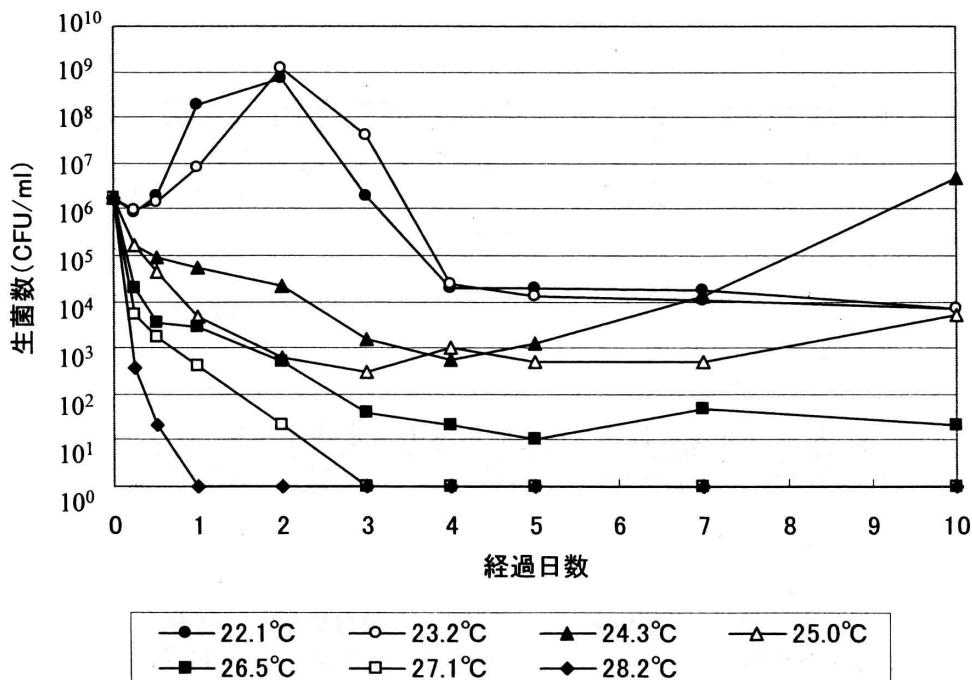


図 冷水病菌の各温度における生菌数の推移。